日本とは様々な部分で環境が異なるドイツにおいて、日本国内と同等の教育を目指すための授業の工夫について

前フランクフルト日本人国際学校　教諭
東京都墨田区立柳島小学校　教諭　本　田　千　晶

キーワード：在外教育施設、ドイツ、日本国内と同等の教育、現地理解・交際交流

１．はじめに

1985年創立のフランクフルト日本人国際学校は、ドイツの西側に位置する人口約73万人の国際金融都市Frankfurt am Mainにある。EU中央銀行を有するとともに空と陸の交通の要衝でもある。欧州３大ハブの１つである国際空港は山手線より過密なスケジュールである。国際列車が乗り入れる中央駅は、地上と地下で40以上の番線を有している。さらには高速道路アウトバーン第１号の開通もここであった。そうした環境にあって、本校へは小学部（11学級）と中学部（３学級）の約280名の児童生徒が通学しており、規模では北米・欧州４番目である。日本人国際幼稚部を併設し、同じ校舎を使って補習校も授業を行っている。教育目標を「①一生懸命勉強しよう　②異なったものを認めよう　③豊かな心と感謝の気持ちを育てよう　④たくましい身体と心をつくろう」とし、心身ともに調和のとれた児童の育成に保護者とともに尽力している。小学部１年からドイツ語が、３年生から英語が開始される。また、本校で行われている「現地理解・国際交流」活動は多種多彩かつ特筆すべきものも多い。

２．児童の実態

日本人学校に通う小学部の児童たちは、保護者の海外赴任に伴い２、３年日本人学校に在籍し、帰国という場合が多い。しかし、幼稚部もしくはそれよりも小さい時から長くドイツに住んでいて、小学校入学のタイミングで日本人学校に通う児童、現地校に通っていたが途中から日本人学校に通う児童なども存在する。母国語は日本語であり、生活する中で不自由はないくらいの日本語を話す。しかし、思考の基となるのはドイツ語や英語であり、文法や書く力がない場合もある。そんな児童たちも在籍する日本人学校で、日本国内と同等の教育を目指すためにどんな工夫ができるのか授業実践を行った。また、ドイツにいながらも日本の文化を学ぶための行事がいくつかある。その行事に参加する児童の様子をまとめた。

３．実践報告

(1) 実践例１：補習校小学部２年　国語『お手紙』

◎巡回指導の児童の様子

大きな挿絵を使用して場面の確認をしたり、黒板ほどの大きさの模造紙にワークシートや教科書のコピーを貼ったり、注目するポイントを明確にすることで児童も集中して取り組めていた。本時のねらいを「お話の内容を理解し、誰が話している言葉なのか読み取ることができる」とした。そこで、第１次に登場人物、お話の内容、主語と述語の関係の確認をしてから、ねらいに迫っていった。主語と述語のワークシートの問題には「主語」「述語」だけでなく、「修飾語」も織り交ぜた。児童に「問題の中には主語でも述語でもない言葉も紛れているから気を付けてね」と声掛けをした。中には主語、述語はすぐに理解し、主語でも述語でもない言葉とは何かという疑問を持つ児童まで出てきた。最終的に「修飾語」にまで触れることができた。そして、誰が話している言葉なのかという主活動は、主語と述語の学習をもとに、ほとんどの児童がスムーズに理解することができた。

第２次以降の授業は補習校の先生が実践してくださった。第２次では気持ちを考える根拠となる文にサイドラインを引かせながら、がまくんやかえるくんの気持ちを捉えていった。「なぜ２人は悲しい気分なのか」「なぜか

えるくんは、自分でお手紙を持って行かず、かたつむりくんに頼んだのか」「ベッドでお昼寝をしていたがまくんの投げやりな態度と期待に胸を膨らませてお手紙を待ちわびるかえるくんの対照的な姿」「とうとうお手紙のことを話してしまったかえるくんの気持ち」などを、会話文や２人の行動から捉えていった。「かえるくんには、うさぎの友達がいなかったのだろうか」という疑問を投げかける児童もおり、足の速いかえるくんが、足の遅いかたつむりくんにわざわざお手紙を頼んだおもしろさや、そこに物語の鍵があるのだということに、気付くこともできた。

第３次では、音読劇を行った。３人のグループに分かれ、がまくん、かえるくん、かたつむりくん、ナレーターの配役を決めて、２ページずつ読んでいく活動をした。ただすらすら読めるだけでは意味がないこと、句読点での間の取り方、感情の込め方、声のトーンにまで意識させながら、練習をさせた。配役は既に決めており、自分のパートを練習してくるように指示をしていたので、中には暗記をしており、教科書なしで音読劇に取り組める児童もいた。想像以上の出来栄えとなった。

◎成果と課題

普段は現地の学校に通いドイツ語で学習している児童が、週１回の補習校に来て、日本で使われている教科書を使いながら学習するということで、言語のことだけでなく教材の精選や、教材の工夫など多くの課題があった。日本の教科書を使用して、授業を進めていくにあたって、学習内容の精選が必要不可欠になってくる。授業でどの部分を扱って、どの部分を省略したり簡潔化したりしていくか、またどの部分を家庭にお願いするのか、計画を立てていく必要があった。日本人学校では、小学部１年生からドイツ語、英語が時間割の中に組み込まれている。さらに、ドイツならではの活動を体験させる為行事も盛りだくさんである。そのような状況の中で日本と同等の教育をするためには、補習校の授業から感じたように、学習内容の精選が必要不可欠である。また、教材を作成するにあたり、児童にすべて書かせるのか、穴埋めにするのかが難しかった。特に低学年の場合、ノートは最低限にとどめ、教科書に直接書き込む、ワークシートを使用する等の授業になりがちである。しかし、書く力を身に付けるために、まずは黒板をノートに写すことから少しずつ指導していかなければいけないと改めて感じた。

(2) 実践例２：小学部　『水泳教室』

◎概要

本校にはプール施設がない。しかし、保護者からの水泳指導への希望が高く、毎年現地のプールで水泳教室を行っている。実施可能回数は、2018年度は約４時間程度であった。往復の移動時間がかかる屋内プール施設にバスをチャーターして向かい、そこで実施している。水泳学習を行うためのプール施設かどうかという条件もなかなか難しく、安全面への配慮から保護者に各学年４名のボランティアをお願いし、プールサイドから児童の安全を確認していただいている。日本の学校とは違い、少ない授業回数の中ではあるが、児童たちは毎回の学習で成長が見られる。また、保護者の方も学校で利用したプールに家庭で行き、泳ぎの練習をしてくださっている。ドイツのプールは、一部分深さが３ｍある。ドイツ人は、小さな子どもも、親と一緒にそこで泳いでいたり、飛び込み台から飛び込んだりしている。事故があったら自己責任という感覚があるからであろう。学校で水泳教室を行う以上、そのような事故がないように安全面ではかなり配慮が必要である。その点で、保護者のボランティアという協力は大変ありがたいものである。

プールに向かう様子

◎成果と課題

スポーツがさかんなドイツで、現地のプールを利用しながら水泳教室を行うことで、家庭でもプールに行く回数が増えたり、児童の泳力も伸ばすこと

ができたりと教育的効果の高い取り組みである。ドイツのプールを利用することで、日本のプールとの違いに気付くこともできた。しかし、授業時数の確保や泳力を伸ばすという面では課題が多い。授業時間 4 時間の中でどのような指導するのか、検討する必要があると感じた。

(3) 実践例３：小学部２年　『生活科　町探検』

◎概要

小学部 2 年の生活科の学習で「町たんけん」を行った。学校から 2 駅ほど離れたLeipziger Strasse 駅に電車で向かい、駅周辺の商店街で自分の欲しいものを買うという学習である。保護者ボランティアの方のご協力のもと児童たちは 4 ～ 5 人の班で活動を行う。班には必ず教員もしくは保護者ボランティアの方が付いて、班ごとにドイツ語で買い物をしたり、挨拶や感謝を伝えたりする。事前にドイツ語の学習で、買い物表現や挨拶を学ぶ。さらに、生活科の学習では、何をいくつ買うのか、値段はいくらぐらいなのか予想をし、計画を立てる。それらのことを活かしながら、お買いもの体験を行った。

◎成果と課題

ドイツでは小さな子どもだけで外出することができない為、小学 2 年生の児童たちが自分で何を買うか計画し、ドイツ語の授業でお買い物の表現を練習し、お小遣いを持って出かけるという体験はとても有意義なものとなった。日本では、当たり前にできるような体験もドイツではなかなか簡単にできないことも多い中、多くの保護者ボランティアの方のおかげで実施できることができた。しかし、安全性の確保が最大の課題だと感じた。2016 年にはベルリンのクリスマス・マーケットでテロ事件が発生し、校外学習を行う際に引率教員と保護者ボランティアの人数を十分に確保しなければならないというのも日本での活動と大きく異なった。今日、ヨーロッパではいつどこでテロや暴動が起きてもおかしくない状況にある。そのため、現地で日本と同じような活動を児童たちにさせたいが、させたいこととできることとの両方の観点から活動を進めることは難しかった。

(4) 実践例４：小学部２年　『生活科　町の人に会いに行こう』

◎概要

小学部 2 年の生活科で「町の人に会いに行こう」の学習を行った。学校から徒歩 15 分圏内にあるお店に行き、働いている様子を見たり、インタビューをしたりする活動である。ドイツ語科の教員にも同行してもらい、インタビューをして答えていただく際、通訳をお願いした。ここ 3 年間は、郵便局、パン屋、日本食材店の 3 つのお店に見学に行っている。しかし、2017 年度はお店側の都合で直前に郵便局が受け入れられないということになり、パン屋と日本食材店のみに行くことになった。事前の学習で、どのように働いているか図書室で調べ、疑問に思ったことをお店の人にインタビューをした。

◎成果と課題

パン屋での様子

地域の人との関わりを深めることで、地域に親しみをもち、地域で生活し働いている人々が自分の生活を支えていることに気づくことができた。児童は事前の学習である程度のことは学習していたが、お店の方の働く様子や実際のインタビューを通して、さらに理解が深まったようであった。しかし、授業時数の関係で 1 日に 2、3 件のお店を回らなければならず、事前の連絡調整や打ち合わせがとても難しかった。ドイツでは担当者の裁量が大きく、例年同じ活動をする場合でも、担当者が変われば今まで可能だったものが不可能になることもある。組織としての統一性がないのだ。また、数か月前から予

約していたのにも関わらず、直前になって受け入れが不可能になる場合も多々ある。日本の学校では活動を行う際、数か月前から計画を立て、実施日の数週間前には細案をもとに確認をするが、ドイツの場合は前日になってようやく連絡がつくということもある。

４．終わり

私たち派遣教員は、日本の小学校と同等のカリキュラムに沿って学習を進めていくことが求められている。日本では簡単に準備できるがドイツではそう簡単にいかないことも多く、教材研究をしたり、何か代わりになるものはないか探したりしながら、授業を進めることが多かった。補習校で巡回指導させていただいた中でも指導方法に新たな気付きがあった。普段、ドイツの現地校に通いながら土曜日に補習校に来る子どもたちとの授業では、発想も日本の学校に通う子どもたちとは違っていたり、コミュニケーションの仕方もさまざまであったりと、とても新鮮で自分の考え方の視点が変わるほどであった。それと同時に日本人学校で授業を行っていく中で、ドイツで日本と同じ教育を行うことに困難を感じたことも多かった。特に小学校低学年の日本語の習得という点では、町でみかける看板や標識、お店の商品に日本語が一切ないため、子どもたちの語彙力を増やすことに難しさを感じた。その点では、保護者の方にお買い物に行った時に日本語の名前を教えてあげてほしいと呼びかけたり、読書や読み聴かせを奨励したりした。3 年間の任期を終え、在外教育施設というこの特殊な環境を子どもたちの成長によりよく生かしていくことが最も重要なのではないかと考えるようになった。フランクフルト日本人国際学校では多くの行事があった。日本ならではの行事はもちろんドイツにしかないイベントを楽しむ行事もあり、現地理解・国際交流をする機会が多くある。ドイツにいるからこそ体験し、理解できることがたくさんあるのだ。この学校で経験して、学んだことは子どもたちにとっても私にとっても意義深いものとなった。世界情勢が緊迫しているこの時代にドイツのフランクフルトで生活してきたことを、子どもたちには今後の人生においてぜひ役立てて行ってほしいと強く願っている。そして、私自身も、この 3 年間で研修させていただいたことを日本の子どもたちのために役立てていきたいと思う。